

キャリアデザイン学研究科

学部基礎情報

<p><b>【理念・目的】</b>（2018年度自己点検・評価報告書より）</p> <p>キャリアデザイン学研究科の理念・目的は、「自由を生きぬく実践知」をふまえ、経営、教育、文化、心理の四つの専門分野をバックグラウンドにしなが、個人のキャリアを学際的に明らかにするとともに、企業、公共団体、NPO、大学・高校などにおいてキャリア支援、キャリアサポートをになう高度職業人の養成にある。</p>																																																							
<p><b>【人材の育成に関する目的及びその他の教育研究上の目的（教育目標）】</b> ※学則別表(V)</p> <p>キャリアデザイン学研究科は、「企業、公共団体、NPO、大学・高校などにおいてキャリア支援、キャリアサポートをになう高度職業人の養成」という教育目標のもと、以下に示すような能力等を有する専門家および高度職業人を育成する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 職業人としてのキャリア形成、仕事と家庭生活の両立、これから社会に出ていく若者のキャリア形成など、キャリアにかかわる複雑で多様な諸現象を学際的に研究する専門能力を有する人材</li> <li>2. 1で提示したキャリアにかかわる諸問題の背後に存在する、課題に直面した人々を支援するマインドを持った人材</li> <li>3. 多様な人材の活用に伴う企業の人材採用・育成方針の変化や雇用形態の多様化、企業人のグローバル・キャリアへの対応や留学生のキャリア支援などの様々な現代的な課題を適切に理解し、対処できる人材</li> </ol>																																																							
<p><b>【ディプロマ・ポリシー】</b></p> <p>「経営学、教育学と隣接する学問分野をバックグラウンドにした個人のキャリアの学際的な解明」、「企業、公共団体、NPO、大学・高校などでキャリア支援を担う高度職業人の養成」という教育理念を踏まえ、所定の単位を修得し、修士論文の審査に合格し、以下に示す水準に達した学生に対し、「修士（キャリアデザイン学）」を授与する。</p> <p>DP1. 学際的な専門知識を身につけている</p> <p>DP2. 自らの職業経験を生かした研究課題を設定できる</p> <p>DP3. 社会調査の手法を駆使した実証的な研究を遂行できる</p>																																																							
<p><b>【カリキュラム・ポリシー】</b></p> <p>基礎・共通科目をベースにキャリア教育・発達プログラム、ビジネスキャリアプログラムの2分野のプログラムを設置している。それぞれのプログラム科目には、キャリア発達科目群、キャリア・プロフェッショナル科目群、キャリア政策科目群という、ミクロ・メゾ・マクロの3分野からなる科目群を配置している。それらの科目の履修の上で演習科目において修士論文指導を行う。</p> <p>CP1 共通科目ならびにキャリア教育・発達プログラム・ビジネスキャリアプログラムそれぞれの科目では、学際的な専門知識を習得する。</p> <p>CP2 演習科目では、学際的な専門知識ならびに研究遂行能力をもとに、自らの職業経験を生かした研究課題を設定し、社会調査の手法を駆使した修士論文を作成する。</p> <p>CP3 基礎科目では、社会調査の手法を駆使した実証的な研究の遂行に必要な能力・スキルの獲得を目指す。</p>																																																							
<p><b>【アドミッション・ポリシー】</b></p> <p>企業や公共団体、NPO、大学・高校などの機関で人事・教育・キャリア支援などを担当する方や、キャリアコンサルタントとして、より高度な専門職を目指している方などを積極的に受け入れる。</p> <p>選抜は秋季・春季1回ずつ合計2回、筆記試験ならびに口述試験による選抜試験を行っている。口述試験では、「研究計画書」及び「キャリアストーリー報告書」に基づいて丁寧な面接を行う。筆記試験ならびに口述試験の結果に基づき、上記ポリシーに即した人材の選抜を行っている。</p>																																																							
<p><b>【定員管理の状況】</b></p> <p>定員充足率(2017～2021年度)(各年度5月1日現在)</p> <p><b>【修士・研究科合計】</b></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>年度</th> <th>入学定員</th> <th>入学者数</th> <th>入学定員充足率</th> <th>収容定員</th> <th>在籍学生数</th> <th>収容定員充足率</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>2017</td> <td>20</td> <td>17</td> <td>0.85</td> <td>40</td> <td>38</td> <td>0.95</td> </tr> <tr> <td>2018</td> <td>20</td> <td>16</td> <td>0.80</td> <td>40</td> <td>38</td> <td>0.95</td> </tr> <tr> <td>2019</td> <td>20</td> <td>20</td> <td>1.00</td> <td>40</td> <td>38</td> <td>0.95</td> </tr> <tr> <td>2020</td> <td>20</td> <td>17</td> <td>0.85</td> <td>40</td> <td>44</td> <td>1.10</td> </tr> <tr> <td>2021</td> <td>20</td> <td>16</td> <td>0.80</td> <td>40</td> <td>43</td> <td>1.08</td> </tr> <tr> <td>5年平均</td> <td></td> <td></td> <td>0.86</td> <td></td> <td></td> <td>1.01</td> </tr> </tbody> </table>							年度	入学定員	入学者数	入学定員充足率	収容定員	在籍学生数	収容定員充足率	2017	20	17	0.85	40	38	0.95	2018	20	16	0.80	40	38	0.95	2019	20	20	1.00	40	38	0.95	2020	20	17	0.85	40	44	1.10	2021	20	16	0.80	40	43	1.08	5年平均			0.86			1.01
年度	入学定員	入学者数	入学定員充足率	収容定員	在籍学生数	収容定員充足率																																																	
2017	20	17	0.85	40	38	0.95																																																	
2018	20	16	0.80	40	38	0.95																																																	
2019	20	20	1.00	40	38	0.95																																																	
2020	20	17	0.85	40	44	1.10																																																	
2021	20	16	0.80	40	43	1.08																																																	
5年平均			0.86			1.01																																																	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

※1 定員充足率における大学基準協会提言指針

【対象】大学院研究科における収容定員に対する在籍学生数比率

【定員超過の場合の提言指針】※是正勧告なし

提言	改善課題
修士・博士共通	2.00 以上

【定員未充足の場合の提言指針】※是正勧告なし

提言	改善課題
修士	0.50 未満
博士	0.33 未満

【求める教員像および教員組織の編成方針】（2018 年度自己点検・評価報告書より転記しています）

キャリアデザイン学という学際的な領域の性格上、経営、教育、文化、心理の専門分野の教員組織で教育・研究指導を行なうことが教員組織の編成方針であり、教員には経営、教育、文化、心理の専門領域での学識に加えて、各領域を横断する学際的な研究・指導のセンスと実績がもたせられるところである。

I 2021 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2021 年度大学評価結果総評】（参考）

キャリアデザイン学研究科は、2020 年度以降、新型コロナウイルス感染拡大という事態を受けて、原則としてオンラインでの授業が展開されているものの、従来の教育水準を維持するため、オンライン授業の実施に関する有益な情報を教員間で共有するなど、さまざまな取り組みが行なわれていることは評価に値する。また、入学直後のオリエンテーションにおける充実した履修指導や、厳正な審査にもとづく成績評価、学位基準の周知徹底、学位授与にかかわる責任を教授会全体が負う仕組みの確立、年 3 回実施されている修士論文構想発表会・中間発表会を通じた研究水準の維持および向上のための試みなど、充実した教育体制が整えられていることは特筆に値する。さらに、現役の大学院生のみならず、研究科修了生の研究レベルの向上をも視野に入れた息の長い指導体制が整えられており、大学院シンポジウムにおいて、修了生による研究成果の報告がなされたり、修了生による学会誌への投稿が採択されたりするなど、具体的な成果がみられることも高く評価できる。

一方検討課題として挙げられていた、「社会人を主体とした大学院としての役割を踏まえ、実践的応用性を重視した論文も評価の対象とする」点は、その着実な実行を視野に入れた検討作業に期待したい。大学院の運営業務と研究活動・社会貢献活動との両立については、限られた人的資源を有効に活用しつつ両者の活性化を促すための環境づくりが今後とも求められる。質保証委員会による改善の提言で指摘されている、教育課程全体の効果を検証していくための仕組みづくりや、教員の業務負担の削減にむけた組織的な取り組み、マンツーマン指導の徹底という原則の根本的な見直しを含めた検討作業、修了生の研究成果の実務界への還元にかかわる取り組みの進展、定員充足率の漸減に対する対策の検討に期待したい。なお、2021 年度目標、達成指標いずれも昨年度とほぼ同じ文言（あるいはほぼ同じ内容）となっているものがある。前年度の「質保証委員会による点検・評価」に記されている「改善のための提言」を踏まえつつ、将来にむけた研究科としての展望を示しうる発展性のある目標設定を行なうべきだろう。

【2021 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

上記評価結果の検討課題の要点は以下の点であった。

- ①社会人を主体とした大学院としての役割を踏まえ、実践的応用性を重視した論文も評価の対象とする
- ②大学院の運営業務と研究活動・社会貢献活動との両立
- ③教育課程全体の効果を検証していくための仕組みづくりや、
- ④教員の業務負担の削減にむけた組織的な取り組み、
- ⑤マンツーマン指導の徹底という原則の根本的な見直しを含めた検討作業、
- ⑥修了生の研究成果の実務界への還元にかかわる取り組みの進展、
- ⑦定員充足率の漸減に対する対策の検討に期待したい。

これらの課題のうち①～⑤を踏まえて 2021 年度から取り組んできたテーマの 1 つとして「教育効果のさらなる向上を目的として、学部と院とのバランス、教員負担軽減の観点から、カリキュラム、指導制、指導方法、修論の要件等の見直しを行う」がある。執行部、教授会での検討を重ねて具体的な改善案がしぼられてきた。2022 年度は昨年度の検討を踏まえてさらに具体的に検討を進め、一定の方向性を決める。

また、⑥については大学院説明会シンポ、学会での発表、修士論文をもとにした指導教員との共著形式などの一般書籍の刊行などを行ってきた。

⑦の充足率については、低下している認識ではなく、2019 年の 1.00 の除くと 0.8 台で推移しており、今後とも受験者そのものの増加を目指して、受験者の学力、資質の向上を図り、結果として一定基準を下げることなく合格者、入学者数を定員まで増やすという考え方を当面、継続していく。

（参考）受験者数の推移

以下のデータにみるように、2021 年度はコロナの影響で筆記試験を実施しなかったこともあり、受験者が 49 人と過去最

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

高であったが、40名程度（定員の約2倍）で推移している。  
 なお受験者数、（入学者）、長期履修者の推移は以下である。  
 2022年度入試：42名（内合格・入学者18名）長期履修1名（4年制：1名）  
 2021年度入試：49名（内合格・入学者16名）長期履修3名（3年制：2名、4年制：1名）  
 2020年度入試：40名（内合格・入学者17名）長期履修5名（3年制：5名）  
 2019年度入試：31名（内合格・入学者20名）長期履修12名（3年制：9名、4年制：3名）  
 2018年度入試：36名（内合格17名・入学者16名）長期履修9名（3年制：5名、4年制：4名）  
 2017年度入試：37名（内合格・入学者17名）長期履修制度導入なし

【2021年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

キャリアデザイン学研究科の2021年度大学評価委員会の評価結果で指摘された検討課題に対する対応に関しては、修了生の研究成果の実務界への還元にかかわる取り組みの進展という課題について、大学院説明会シンポ、学会での発表、修士論文をもとにした指導教員との共著形式などの一般書籍の刊行などの具体的な取り組みが行われたことは評価できる。

定員充足率については、特に低下傾向は見られず、また2021年度には、新型コロナウイルス感染症対策で筆記試験を実施しなかったことの過渡的影響と判断されるとはいえ、受験者数が過去最高に増えたことは評価できる。充足率は定員には達していないが、5年間の平均は86%であり、概ね適正に管理されている。

残りの検討課題については、2022年度は昨年度の検討を踏まえてさらに具体的に検討を進め、一定の方向性を決めるとされており、検討が進み改善案がまとめられて実効性がある方策が具体的に提示されることを期待したい。

II 自己点検・評価

1 理念・目的

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 大学の理念・目的を適切に設定しているか。また、それを踏まえ、学部・研究科の目的を適切に設定しているか。

1.1①研究科（専攻）の理念・目的は大学の理念・目的を踏まえて設定されていますか。2018年度1.1②に対応

はい

1.1②理念・目的の適切性の検証プロセスを具体的に説明してください。2018年度1.1③に対応

※検証を行う組織（教授会や各種委員会等）や検証の時期等、具体的な検証プロセスを記入。

大学院生の研究成果や修士課程修了後の継続的研究活動、学会発表・学会誌への論文投稿などの具体的な成果、また、修了生の社会における幅広いキャリア支援活動の報告、まあ質保証委員会からの点検・評価等を通して、キャリアデザイン学研究科が掲げる理念・目的が具体的に達成されているかを定期的に検証している

1.2 大学の理念・目的及び学部・研究科等の目的を学則又はこれに準ずる規則等に適切に明示し、教職員及び学生に周知し、社会に対して公表しているか。

1.2①研究科（専攻）の理念・目的は学則又はこれに準ずる規則等に明示していますか。2018年度1.2①に対応

はい

1.2②研究科（専攻）の理念・目的を教職員及び学生に周知し、社会に対して公表していますか。2018年度1.2②に対応

はい

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

当研究科の長所・特色は、社会人を対象とした実践的な高度職業人を養成する研究科であることにある。修了生の卒業後、実社会での幅広いキャリア支援での研究、実践活動が展開されている。また在学中の院生の研究活動が活発であり、それらが当研究科としての理念・目的を具現化している。

(3) 課題・問題点

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既の実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
とくになし

**【理念・目的の評価】**

キャリアデザイン学研究科の理念・目的は、大学の理念・目的を踏まえて適切に設定されている。研究科の理念・目的の適切性は、その検証が主として研究科の構成員である個人に任されているほか、質保証委員会からの点検・評価等を通して定期的に検証しているとされているが、理念や目的は環境の変化に応じて適切性が保たれていることを組織的に確認するプロセスを確立するのが望ましく、具体的な検証プロセスを明示することが望まれる。

研究科の理念・目的は、学則に明示されている。研究科の理念・目的は、募集要項、ホームページ、シンポジウムなどを通じて周知・公表されている。

**2 内部質保証**

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 内部質保証システム（質保証委員会）を適切に機能させているか。

2.1①質保証委員会は適切に活動していますか。2018年度2.1①に対応

はい
<p>【2021年度質保証委員会の構成、開催日、議題等】※箇条書きで記入。</p> <p>質保証委員会は研究科教授会構成員のうち2名の専任教員から構成されるが、質保証委員会だけではなく、定例教授会においても、機会あるごとに質保証に関する話し合いや点検を実施し、積極的な意見交換や問題提起を行い、検証を行っている。また年2回開催の質保証委員会では（2021年度は2022年3月16日と2022年5月13日）、授業改善アンケート、修士論文評価と指導の在り方、調査法授業の展開の仕方、オンライン授業についての評価等に関する議論を行い、研究科の質保証を意識した委員会活動、具体的な取り組みを実施している。</p>

2.1②質保証委員会等の内部質保証推進組織は、COVID-19 への対応・対策の措置を講じるにあたってどのような役割を果たしましたか。新規

※取り組みの概要を記入。
オンライン授業、ハイブリッドおよびオンラインで実施した修士論文検討会について、教員に対しての聞き取り調査、授業アンケートなど複数の資料を用いて点検・評価を行い、オフラインと遜色のない水準の質が担保されていることを確認した。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
2021年度中期目標・年度目標達成状況報告書

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
<p>年2回の質保証委員会における点検のみならず、月ごとの定例教授会でも質保証についての議論や検証を随時行っている。他研究科に比べ小規模な研究科であることのメリットの一つとして、小回りのきく機動性が挙げられるが、質保証をめぐる教員全員参加型の掘り下げた意見交換の機会を随時持つことができるのは、そうした機動性に基づいたことである。</p> <p>以上のような機動的な取り組みを基盤とし、以下のような研究科としての特色が得られていると考えられる。第一に、個人指導と集団指導を効果的に組み合わせ、院生に対する手厚い研究サポートを展開していること、第二に、毎年度、安定的に、高い入試定員充足率を維持していることである。</p>

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既の実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。  
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ  
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

内容
特になし

**【内部質保証の評価】**

キャリアデザイン学研究科では 2021 年度に質保証委員会が 2 回開かれ、同委員会は適切に活動している。また、毎月の定例教授会においても質保証に関して活発な意見交換や問題提起が行われていることは評価できる。  
 COVID-19 への対応・対策については、オンラインの授業および修士論文検討会に関して教員に対しての聞き取り調査、授業アンケートなど複数の資料を用いて点検・評価が行われ、オフラインと遜色のない水準の質が担保されていることが確認されている。

**3 教育課程・学習成果**

(1) 点検・評価項目における現状

3.1 授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。

3.1①研究科（専攻）として修得すべき学習成果、その達成のための諸要件（修了要件）を明示した学位授与方針を設定していますか。2018 年度 3.1①に対応

はい

3.2 授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。

3.2①学生に期待する学習成果の達成を可能とするための教育課程の編成・実施方針を設定していますか。2018 年度 3.2①に対応

はい

3.2②教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針を周知・公表していますか。2018 年度 3.2②に対応

はい

**【根拠資料】** ※冊子名称やホームページ URL 等。  
 募集要項、ホームページ、シンポジウム、進学相談会、シラバス等

3.2③教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針の適切性と連関性の検証プロセスを具体的に説明してください。

2018 年度 3.2③に対応

A : 従来通り効果的に取り組むことができた

※検証を行う組織（教授会や各種委員会等）や検証の時期等、検証プロセスを記入。  
 教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針の適切性に関しては、大学院教授会において、機会あるごとに定期的に振り返り、全教員参加の討議を通して、当面の課題を整理し改善提案を行い、実行可能な所から具体的に行動に移している。また、学生による「授業改善アンケート」結果からも研究科のあり方や適切性を検証する貴重な資料として精査し検討を行っている。  
**【2021 年度に改善された事項および新規取り組み事項等】** ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。  
 授業改善アンケート

3.3 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

3.3①修士課程においてコースワーク、リサーチワークを適切に組み合わせ、教育を行っていますか。2021 年度 1.1①に対応

A : 従来通り効果的に取り組むことができた

※コースワーク、リサーチワークを組み合わせた教育課程の概要を記入。  
 本研究科は①キャリア教育・発達プログラム、②ビジネスキャリアプログラムの 2 つのプログラムより編成され、各プログラムに対応するプログラム科目を設置している。また、コースワーク基礎科目、共通科目を設置し、そのうえで

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。  
 ※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ  
 ※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

<p>サーチワークに対する個別指導（修士論文指導、演習）を行っている。教育課程を体系的に編成し、関心のある研究テーマを掘り下げることが可能となるように綿密に組み立てられている。</p> <p>【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p>
<p>特になし博士後期課程を設置していないため該当なし</p>
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p>
<p>キャリアデザイン学研究科カリキュラム</p>

3.3②博士後期課程において授業科目を単位化し、修了要件としていますか。2021年度 1.1②に対応

<p>【はい・いいえ】どちらかを選択してください</p>
<p>【根拠資料】※「はい」を選択した場合に単位化及び修了要件として設定されていることが確認できる資料を記入。</p>
<p>博士後期課程を設置していないため該当なし</p>

3.3③博士後期課程においてコースワーク、リサーチワークを適切に組み合わせ、教育を行っていますか。2021年度 1.1③に

<p>【S・A・B】いずれかを選択してください</p>
<p>※コースワーク、リサーチワークを組み合わせた教育課程の概要を記入。</p>
<p>博士後期課程を設置していないため該当なし</p>
<p>【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p>
<p>博士後期課程を設置していないため該当なし</p>
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p>
<p>特になし</p>

3.3④専門分野の高度化に対応した教育内容を提供していますか。2021年度 1.1④に対応

<p>A：従来通り効果的に取り組むことができた</p>
<p>※学生に提供されている専門分野の高度化に対応した教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。</p>
<p>【修士】</p> <p>入学者・修了生アンケート等を活用して教育の状況を把握しており課題が生じた場合は研究科教授会場で共有・検討し、教育内容の改善につなげるというプロセスを毎年実行している。また、社会の潮流や研究の動向も踏まえ、授業内で用いるテキスト、輪読論文の変更、講義スライドの変更など、各教員が教育内容を刷新している。また、これらを実効性のあるものとして実現するために、各教員が最先端の研究を行い、教育研究能力の研鑽に努めるとともに、その成果を公表している。</p>
<p>【博士】</p>
<p>博士後期課程を設置していないため該当なし</p>
<p>【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p>
<p>特になし</p>
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学院シラバス</li> <li>・学習支援システム授業情報</li> <li>・法政大学 学術研究データベース</li> </ul>

3.3⑤大学院教育のグローバル化推進のための取り組みをしていますか。2021年度 1.1⑤に対応

<p>A：従来通り効果的に取り組むことができた</p>
<p>※大学院教育のグローバル化推進のために行っている取り組みの概要を記入。</p>
<p>【修士】</p> <p>外国籍の応募者は例年若干名であるが、現在のところ合格者は出ていない。従来から引き続き、性別・年齢・国籍を問わず、研究遂行能力に基づいて入学者を選抜する方針をとっており、入学試験において外国人留学生を優遇する策を導</p>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

<p>入する予定はないが、全学的に活用できるサポート制度の活用やメンターの積極的な募集など、外国人留学生が研究しやすい環境を整備していく。</p> <p>教育内容に関しては、教員による国際比較研究や海外と対象とした研究が進められており、それらの研究成果に依拠した、グローバルな観点およびグローバル社会に関する知見に基づく教育も行われている。</p>
【博士】
博士後期課程を設置していないため該当なし
【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
特になし
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
特になし

3.4 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

3.4①学生の履修指導を適切に行っていますか。2021年度1.2①に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた
【履修指導の体制および方法】※箇条書きで記入。
【修士】
<p>入学直後のオリエンテーションの際、学科長から大学院要項、講義要項に基づいて、大学院での2年間の学習を展望した履修指導を行っている。また、修士論文構想発表会など本研究科独自のイベントの時期と趣旨を踏まえた研究のスケジュールに関する指導もオリエンテーションにて行っている。個々の授業に関しては、授業概要は Web シラバスおよび学習支援システムに詳細な説明を掲載することで対応している。</p>
【博士】
博士後期課程を設置していないため該当なし
【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
特になし
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
<ul style="list-style-type: none"> <li>・キャリアデザイン学研究科シラバス</li> <li>・学習支援システム授業情報</li> <li>・新入生オリエンテーション資料</li> </ul>

3.4②研究科（専攻）として研究指導計画を書面で作成し、あらかじめ学生が知ることのできる状態にしていますか。2021

年度1.2②に対応

はい
<p>※ここでいう「研究指導計画」とは、事務手続きのスケジュールやシラバス等の個別教員の指導計画を指すのではなく、研究科としての研究指導体制及び研究指導スケジュールをまとめたものを指します（学位取得までのロードマップの明示等）。また、「あらかじめ学生が知ることの状態」とは、HP や要項への掲載、ガイダンスでの配布等が考えられます。</p>
【修士】
<p>新入生オリエンテーションにおいて研究指導計画を書面にて配付している。併せて、修士論文提出に至る流れを口頭でも説明している。さらに、2019年度より研究指導計画を大学院ウェブサイトにて公表している。</p>
【博士】
博士後期課程を設置していないため該当なし
【根拠資料】※研究指導計画が掲載された文書・冊子の名称を記入。
<ul style="list-style-type: none"> <li>・新入生オリエンテーション資料</li> <li>・大学院ウェブサイト（研究指導計画）</li> </ul>

3.4③研究指導計画に基づく研究指導、学位論文指導を行っていますか。2021年度1.2③に対応

はい
※組織的な研究指導、学位論文指導の概要を記入。
【修士】

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

<p>新入生オリエンテーションにおいて、研究指導計画を新入生に書面にて配付し、口頭にて学位取得に至る過程を詳細に説明している。さらに修士1年次の11月の指導教員の申請時期に合わせて修士論文のための研究の進め方に関するガイダンスを行っている。また、年3回（修士1年の修論構想発表会：1回、修士2年の研究構想発表会・修論中間発表会：2回）の修論構想発表会・修論中間発表会を全教員、全学生参加のもとで開催している。この発表会を、キャリアデザイン学研究所における院生の研究に対する集団指導の場としている。その後、研究計画に基づき、担当教員が個別に指導を実施し、修士論文作成指導を原則的にはマンツーマンで丁寧に実施している。これらの各種行事は毎年行っているものであり、年度当初のスケジュールに沿って実施している。コロナの影響もあり、2021年度からはZOOMによるオンライン会議形式で行ってきた。</p>
【博士】
博士後期課程を設置していないため該当なし
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
<ul style="list-style-type: none"> <li>・新入生オリエンテーション資料</li> <li>・修士論文構想発表会プログラム、中間発表会プログラム</li> <li>・1年生対象11月ガイダンス資料（資料名：第1回修士論文構想発表会の位置づけ。10月配付）</li> <li>・研究指導計画（2019年度に大学院ウェブサイトにて公表）</li> </ul>

3.4④シラバスが適切に作成されているかの検証を行っていますか。2018年度3.4④に対応

はい
【検証体制及び方法】※箇条書きで記入（取組例：執行部（〇〇委員会）による全シラバスチェック等）。
<ul style="list-style-type: none"> <li>・シラバスの内容については、執行部（専攻主任、専攻副主任）が詳しくダブルチェックし、改善すべき点があれば直ちに修正依頼を行い、修正後にも確認を行っている。また、学生による授業改善アンケート結果を分析し、シラバスに関し指摘されている課題は、教授会の議題として詳しく取り上げ、全教員で課題を共有しシラバスの検証を行っている。</li> </ul>
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
特になし

3.4⑤授業がシラバスに沿って行われているかの検証を行っていますか。2018年度3.4⑤に対応

はい
【検証体制及び方法】※箇条書きで記入（取組例：後シラバスの作成、相互授業参観、アンケート等）。
<p>学生からの授業改善アンケート内容については、教授会で全教員が共有し、シラバスに沿って適正に授業が行われているかの検証を行っている。</p>
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
特になし

3.4⑥通常の教育課程や教育方法に加え、COVID-19への対応・対策として、教育内容、教育方法、成績評価等の一連の教育活動において工夫を講じていますか。行っている場合はその内容と教育活動の効果についても教えてください。2021年度1.2④に対応

※取り組みの概要を記入。
<p>COVID-19への対応としては、本研究科は実験科目を設置しておらず、討論および講義形式の授業が主体であるため、オンラインでの授業実施も認めてきた。オンライン授業の実施に当たっては、従来の教育水準を維持して行うことを目的とし、従来は教室授業で行っていた内容の授業と成績評価をオンライン上で再現する形で進めている。そのため、オンライン授業の実施に伴う設備やツールの導入を除き、特に従来の授業からの変更点はないが、オンライン授業の実施に関するノウハウや改善点については大学院教員にとどまらず学部教授会や学部のイントラネット上にて情報交換をしている。修士論文の口述試験に関しては、オンライン実施の際の適切な成績評価を行うために実施マニュアルを作成した。授業に関しては2022年5月現在、コロナ状況も踏まえて、授業内容を考慮し担当教員の判断で、従来の対面型とオンライン形式、ハイブリッド形式が併行して実施されている。</p>
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習支援システム授業情報</li> <li>・2020年度第9回教授会配付資料「口述試験の進め方」</li> </ul>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。



3.5 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

3.5①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。2021年度 1.3①に対応

A : 従来通り効果的に取り組むことができた
【確認体制及び方法】※成績評価と単位認定の確認体制及び方法を記入。
【修士】 成績評価は各担当教員が責任をもち厳正に単位認定を行っている。論文審査については主査（1名）・副査（2名）が審査を担当し、口述試験後は審査結果を主査、副査で照合し、相互に率直な意見交換を行って厳正な最終評価を行い、可否を決定している。また、口述試験の際には、読み合わせにて教員間で学位基準の再確認を行い、適正な評価の実施に努めている。
【博士】 博士後期課程を設置していないため該当なし
【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
特になし
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
特になし

3.5②学位論文審査基準を明らかにし、あらかじめ学生が知ることのできる状態にしていますか。2021年度 1.3②に対応

はい
※学位論文審査基準の名称及び明示方法を記入。
【修士】 新入生オリエンテーションにて、配付資料に掲載する形で学位基準を文書にて配付し、口頭にて説明している。また、大学院ウェブサイトにて学位基準を公表している。
【博士】 博士後期課程を設置していないため該当なし
【根拠資料】※学位論文審査基準にあたる文書の名称を記入。また、冊子等に掲載し公表している場合にはその名称を記入。
・新入生オリエンテーション資料 ・キャリアデザイン学研究科 学位基準

3.5③学位授与状況（学位授与者数・学位授与率・学位取得までの年限等）を把握していますか。2021年度 1.3③に対応

はい
※データの把握主体・把握方法、データの種類等を記入。
修士論文提出者に対する学位授与率はほぼ 100%である。2018 年度に長期履修制度を導入したことによって修了年限の管理が複雑化したことにより、大学院事務と連携して名簿管理等を行っている。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
特になし

3.5④学位の水準を保つための取り組みを行っていますか。2021年度 1.3④に対応

A : 従来通り効果的に取り組むことができた
※取り組みの概要を記入。
【修士】 入学時の新入生ガイダンスにおいて学位基準を周知徹底させ、学習に取り組ませている。年3回の修士論文構想発表会・中間発表会の場において、厳しいフィードバックを行い研究科一丸となって、高い研究水準を維持する取り組みを実施している。 また、修士論文審査は主査（1名）、副査（2名）に加えて他の教員も参画し、審査結果は教授会全体で承認するという手続きで行っている。以上の形で、論文審査における適正性の確保と、学位水準の維持を実現する体制を構築している。
【博士】 博士後期課程を設置していないため該当なし

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
特になし
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
・新入生オリエンテーション資料 ・キャリアデザイン学研究科 研究倫理委員会規程

3.5⑤学位授与に係る責任体制及び手続を明らかにし、適切な学位の授与が行われていますか。2021年度 1.3⑤に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた
※責任体制および手続等の概要を記入。ただし、博士については、学位規則のとおりに行っている場合には概要の記入は不要とし、「学位規則のとおり」と記入してください。
【修士】 原則として院生1名に対し1名の指導教員を配置し、指導教員の責任の下で論文の完成に至るまでの指導を行っており、対応すべき問題の発生時には教授会の場で共有して対応をしている。また、学位授与基準に基づいた厳正な論文審査を行うことにより、学位水準を適正に維持する努力を常に行っている。修士論文審査は主査（1名）、副査（2名）に加えて他の教員も参画し、審査結果を教授会全体で承認するという手続で行っている。このように、教授会全体として責任を負う体制のもとで論文指導および学位授与を進めており、この手続は入学時のオリエンテーションおよび指導教員申請時のオリエンテーションにて、執行部から院生に対して説明している。 さらに、研究倫理に沿った実証研究を促進するため、研究科内に研究倫理委員会を設置しており、2019年度に倫理規程を制定し、必要に応じて大学院生の研究の倫理審査を行っている
【博士】 博士後期課程を設置していないため該当なし
【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
特になし
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
・新入生オリエンテーション資料 ・キャリアデザイン学研究科 研究倫理委員会規程

3.5⑥学生の就職・進学状況を研究科（専攻）単位で把握していますか。2021年度 1.3⑥に対応

はい
※データの把握主体・把握方法、データの種類等を記入。
キャリアデザイン研究科の学生は、現職を有する社会人のみであるため、入学時に勤務先、修了時には大学院の修了生アンケートにて現職の状況を把握している。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
・入試出願書類 ・修了生アンケート（就労状況記入欄）

3.6 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

3.6①分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。2021年度 1.4①

に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた
※取り組みの概要を記入。
【修士】 キャリアデザイン学研究科では、知識の吸収にとどまらず、講義や演習、修論構想発表会・修論中間発表会などの機会を通じて、学術論文のサーベイ能力、レポート能力、プレゼンテーション能力、論理的思考能力、問題解決能力など、より専門的なニーズに応える能力の開発に力点を置いている。そうした能力の応用的定着とその成果を把握するべく、講義や演習、修論構想発表会・修論中間発表会などを通じて、知識の吸収にとどまらず、多様な研究発表の機会を与えることで、研究の進捗、能力の向上を適宜、測定している。また、必要に応じて研究科教授会にて教育上の課題について議論している。
【博士】

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

博士後期課程を設置していないため該当なし
【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
特になし
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
院生・修了生の学会発表、論文一覧

3.6②具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。2021年度1.4②に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた
※取り組みの概要を記入。取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学修成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等。
【修士】 各授業内では個別の研究発表、討論、事例研究発表、課題提出などを実施し、学生に多様な研究発表の機会を与え、授業の理解度、その成果等を随時把握している。年3回の修論構想発表会・修論中間発表会においては、研究の進捗度や研究の深化レベル、研究の質を定期的に把握し指導を行っている。そのほか、修了生の学会発表、学会誌への論文投稿、出版物、実務における特記すべきプロジェクト実績なども、大学院での学習、研究成果を測定するための1つの指標としている。
【博士】 博士後期課程を設置していないため該当なし
【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
特になし
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
・キャリアデザイン学研究科ウェブサイト（修了生研究成果一覧）

3.7 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

3.7①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程およびその内容、方法の改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。2021年度1.5①に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた
※検証体制及び方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。
【修士】 研究科内に設置した質保証委員会や定例教授会において、随時、学習成果の検証とそのフィードバックについて意見交換や問題提起を行い、教育の改善・向上に向け、研究科の質保証を意識した取り組みを実施している。個々の授業や演習をはじめ、修論構想発表会・修論中間発表会などの機会において、院生の理解度、研究進捗度をはかり、絶えず教育内容、教育方法の刷新に努めている。
【博士】 博士後期課程を設置していないため該当なし
【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
特になし
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
特になし

3.7②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。2021年度1.5②に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた
【利用方法】※取り組みの概要を記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

<p>学生による授業改善アンケート結果を執行部にて検証し、課題を発見した場合は内容を教授会において全教員で共有し、各教員に結果をフィードバックしている。教育成果、教育内容・方法などの改善内容を教授会にて議論し、組織的に学生からの授業改善アンケート結果を有効に活用し、絶えず教育、指導の質的向上に努めている。</p> <p>【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p>
<p>特になし</p>
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p>
<p>特になし</p>

**(2) 長所・特色**

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
<p>個々の教員による講義、演習に加え、修論構想発表会（2回）・修論中間発表会といった集団指導の機会が確保されていることで、学習成果の把握が促進され、それをもとに教育の改善・向上が行われていくというプロセスが長所・特色と言える。</p>

**(3) 課題・問題点**

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既の実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
<p>従来は学術研究としての質を重視し、修士論文の指導・評価においては学術的貢献を要件としてきたが、社会人を主体とした大学院としての役割をふまえ、実践的応用性を重視した論文も評価の対象とすることを検討している。大学院生、志願者のニーズ、および学部と大学院の教員の人員、負荷のバランスの観点も加えて中長期的に検討していく課題である。院生アンケート等からは評価は高いが、カリキュラム、授業、修士論文の指導体制、修了の要件等の見直しにもとづき、一定の方向性を定める時期であると捉えている。</p>

**【教育課程・学習成果の評価】**

<p><b>&lt;①方針の設定に関すること (3.1~3.2) &gt;</b></p> <p>キャリアデザイン学研究科では、適切に学位授与方針を設定し、またその方針には修得すべき学習成果とその達成のための要件が明示されている。教育課程の編成・実施方針は、適切に設定され、それにより学生に期待する学習成果の達成が可能となっている。教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針は、募集要項、ホームページやシラバスなどを通じて周知・公表されている。教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針の適切性は、教授会において議論され、改善提案が行なわれ、実行可能な場合には対応がなされているほか、学生による「授業改善アンケート」結果を用いた検証も行われている。</p> <p><b>&lt;②教育課程・教育内容に関すること (3.3) &gt;</b></p> <p>キャリアデザイン学研究科の修士課程は、2つのプログラムで構成され、それぞれのプログラムに対応するプログラム科目を設置しているほか、コースワーク基礎科目、共通科目を設置したうえでリサーチワークに対する個別指導を行うことにより、教育課程を体系的に編成し、関心のある研究テーマを掘り下げることが可能となるように綿密に組み立てられており、コースワークとリサーチワークが適切に組み合わせられた教育が行われている。</p> <p>キャリアデザイン学研究科は、入学者・修了生アンケート等を活用して教育の状況を把握しており課題が生じた場合は教授会で共有・検討し、教育内容の改善につなげるというプロセスを毎年実行している。また、社会の潮流や研究の動向を踏まえて各教員が教育内容を刷新しているが、各教員が最先端の研究を行い、教育研究能力の研鑽に努めるとともに成果を公表することで、教育内容の改善の実効性を高めるように努めており、専門分野の高度化に対応した教育内容を適切に提供している。</p> <p>キャリアデザイン学研究科は、国籍を問わず入学者を選抜する方針を取っており、各教員による国際的な研究成果に依拠した国際的な教育が行われていることは、大学院教育のグローバル化推進のための取り組みとして評価される。外国籍の合格者が出ていないことへの対策としては、外国人留学生が研究しやすい環境を整備していくとしている。</p> <p><b>&lt;③教育方法に関すること (3.4) &gt;</b></p> <p>キャリアデザイン学研究科では、学習の履修指導に関しては、入学直後のオリエンテーションの際に、大学院要項、講義要項に基づいて、2年間の学習を展望した履修指導を学科長が行っている。個々の授業に関しては、シラバスと学習支援システムに詳細な説明を掲載することで対応している。</p> <p>研究指導計画の書面での作成と配布については、新入生オリエンテーションにおいて研究指導計画を書面にて交付している。</p>
--

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

研究指導計画に基づく研究指導、学位論文指導については、研究指導計画の書面交付時に口頭で学位取得に至る過程を詳細に説明しているほか、修士の指導教員の申請時期に修士論文のための研究の進め方に関するガイダンスを行っている。修論構想発表会・修論中間発表会が、研究科の全教員、全学生参加のもとで開催し、院生の研究に対する集団指導の場となっており、その後は研究計画に基づき指導教員が修士論文の作成指導を原則として個別に実施している。

シラバスの適切性と授業の検証については、執行部（専攻の主任と副主任）がその適切性を検証し、必要に応じて修正依頼ならびにその確認を行っている。また学生による授業改善アンケートにシラバスに関する指摘があれば教授会の議題として全教員で共有してシラバスの検証が行われている。

COVID-19 への対応・対策については、オンライン授業の実施に伴う設備やツールの導入を除き、特に従来の授業からの変更点はないとしている。オンライン授業の実施に関するノウハウなどについて、大学院教員にとどまらず学部教授会や学部のイントラネット上で情報交換をしていることは評価されるが、その効果について検証することが望まれる。

**<④学習成果・教育改善に関すること（3.5～3.7）>**

キャリアデザイン学研究所では、各教員の責任のもとで厳正な成績評価と単位認定が行われている。

学位論文審査基準については、新入生オリエンテーションで学位基準を文書で配付した上で口頭で説明している。また、大学院ウェブサイトでも学位基準を適切に公表している。

学位授与状況については、修士論文提出者に対する学位授与率はほぼ 100%である。2018 年度に長期履修制度を導入したことによって修了年限の管理が複雑化したため、大学院事務と連携して名簿管理等が行われている。

学位の水準を保つための取り組みについては、入学時の新入生ガイダンスで学位基準を周知徹底させて学習に取り組みせ、年 3 回の修士論文構想発表会・中間発表会でフィードバックを行い高い研究水準を維持する取り組みを実施している。また、修士論文審査は主査 1 名、副査 2 名に加えて他の教員も参画し、審査結果は教授会全体で承認するという手続きで行っており、学位の水準を保つ体制が構築されている。

学位授与に係る責任体制及び手続については、原則として院生 1 名に対し 1 名の指導教員を配置し、指導教員の責任の下で論文の完成に至るまでの指導を行っており、対応すべき問題の発生時には教授会の場で共有して対応をしている。また、学位授与基準に基づいた厳正な論文審査を行うことにより、学位水準を適正に維持する努力を常に行っている。修士論文審査は主査 1 名、副査 2 名に加えて他の教員も参画し、審査結果を教授会全体で承認するという手続きで行っている。

学生の就職・進学状況については、当研究所の学生は、現職を有する社会人のみであるため、入学時に勤務先、修了時には大学院の修了生アンケートにて現職の状況を把握している。

分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標は特に記載されていないが、各種発表会にてその成果は適宜測定されている。

学習成果は、授業内での研究発表や課題提出はもとより、修士論文構想発表会・中間発表会、学会発表、学会誌への論文投稿などを通して、定期的に把握・評価されている。

学生による授業改善アンケート結果は、執行部で検証して発見された課題を教授会で共有し、改善内容を教授会で議論するなど、組織的な利用が適切になされている。

**4 学生の受け入れ**

(1) 点検・評価項目における現状

4.1 学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。

4.1①求める学生像や修得しておくべき知識等の内容・水準等を明らかにした学生の受け入れ方針を設定していますか。

2018年度4.1①に対応

はい

4.2 学生の受け入れ方針に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。

4.2①学生の受け入れ方針に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制をどのように適切に整備していますか。また、

入学者選抜をどのように公正に実施していますか。2018年度4.2①に対応

A：従来通り効果的に取り組むことができた

※取り組み概要を記入。

学生募集に関しては、ホームページ、募集要項、進学相談会、大学院シンポジウム、研究計画書説明会など、あらゆる機会を通して入学志願者に対して詳しい入試情報を提供している。

入学選抜試験には全教員がその過程のいずれかで関わり、受け入れ方針に基づいて公正な入試を実施している。入学試験結果に関しては、結果を全教員が注視し、結果の分析を行い、志願者と入試傾向、その課題を全員で共有し合い、絶えず入学者選抜について検証努力を行っている。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・ホームページ、募集要項、進学相談会、シンポジウム、研究計画書説明会

4.3 適切な定員を設定して学生の受け入れを行うとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。

4.3①定員の超過・未充足に対し適切に対応していますか。2018年度4.3①に対応

はい

※入学定員・収容定員の充足状況をどのように捉えているかを記入。

定員の充足率に関しては、2017年85%、2018年80%、2019年100%、2020年85%、2021年80%と推移している。5年間の平均は86%である。質を厳しく担保しつつも、定員充足率を適正に管理している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

下記、定員充足率表参照

定員充足率（2017～2021年度）

（各年度5月1日現在）

種別\年度	2017	2018	2019	2020	2021	5年平均
入学定員	20名	20名	20名	20名	20名	
入学者数	17名	16名	20名	17名	16名	
入学定員充足率	0.85	0.80	1.00	0.85	0.80	0.86
収容定員	40名	40名	40名	40名	40名	
在籍学生数	38名	38名	38名	44名	43名	
収容定員充足率	0.95	0.95	0.95	1.10	1.08	1.01

4.4 学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

4.4①学生募集および入学者選抜の結果について定期的に検証を行い、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。2018年度4.4①に対応

A：従来通り効果的に取り組むことができた

※検証体制及び検証方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。

学生募集はホームページ、パンフレット、進学相談会、大学院シンポジウムなど、あらゆる機会を通して入学志願者に詳しい入試情報を提供している。2016年度からは、研究計画書に関する説明会を行い、志願者の入学後の研究に関する質問に対し、具体的な対応を行っている。入学者の選抜には全教員が携わり、入試結果の詳しい分析を行い、志願者とその傾向や課題を全員で共有し、入学者選抜に関する検証をその都度行っている。その結果、ここ数年間は定員充足率において高い水準を維持することができている。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

特になし

## (2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

・社会人に対する多様なチャンネルによる入試情報提供を行っており、その結果、一定数の志願者を毎年確保できている。その上で、全教員が入試に関わり、厳しい質の担保と同時に定員充足率の適正な管理がなされている。

## (3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既の実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

内容
・特になし

**【学生の受け入れの評価】**

キャリアデザイン学研究科では、学生の受け入れ方針が定められ、求める学生像ならびに修得しておくべき知識等の内容や水準が適切に明示されている。  
 その方針に基づいて学生募集と入学者選抜の制度・体制が整備され、入学者選抜にはすべての専任教員が関わるなど、公正・公平に実施されている。  
 定員充足率については、充足率が定員には達していないが、5年間の平均は86%であり、概ね適正に管理されている。  
 学生募集や入学者選抜結果の検証は、定期的に行われている。

**5 教員・教員組織**

(1) 点検・評価項目における現状

5.1 大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。

5.1①採用・昇格の基準等において、法令に定める教員の資格要件等を踏まえて、教員に求める能力・資質等を明らかにしていますか。 **2018年度 5.1①に対応**

はい
<p><b>【根拠資料】</b> ※教員に求める能力・資質等を明らかにしている規程・内規等の名称を記入。</p> <p>・2011年に大学院担当教員の基準を明記、資格要件、求める能力・資質を明確化した。基準に基づき高度な専門性、優れた業績をもつ研究者、調査・研究の指導が可能な教員を採用し、適正に配置している。参考として、下記が該当箇所の引用である。</p> <p><b>【求める教員像および教員組織の編制方針】 (2011年度自己点検・評価報告書より)</b>                  キャリアデザイン学という学際的な領域の性格上、経営、教育、文化、心理の専門分野の教員組織で教育・研究指導を行なうことが教員組織の編制方針であり、教員には経営、教育、文化、心理の専門領域での学識に加えて、各領域を横断する学際的な研究・指導のセンスと実績がもたれられるところである。</p>

5.1②組織的な教育を実施する上において必要な役割分担、責任の所在をどのように明示していますか。 **2018年度 5.1②に対応**

<p><b>【研究科執行部の構成、研究科内の基幹委員会の名称・役割、責任体制】</b> ※箇条書きで記入。</p> <p>執行部は研究科長（兼 専攻主任）、専攻副主任の2名から構成され、大学院教授会は月1回開催されている。その他の教員の担当する役割分担は次の通りである。質保証委員、進学相談委員（年3回）、入試作問委員、シンポジウム委員、同窓会委員など、各教員の担当する役割とその内容を明確化し責任体制をとり、適正に実行している。                  業務負担に関しては、各自の負担の公平性や効率性の向上を常に注視している。2020年度からは進学相談会に関して、個別相談形式からグループ相談形式への変更により、担当者を1名削減した。削減による相談会の質の低下は見られなかった。</p> <p><b>【明示方法】</b> ※箇条書きで記入。</p> <p>・下記、キャリアデザイン学研究科 2022年度役割分担一覧表</p> <p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>キャリアデザイン学研究科 2022年度役割分担一覧表</p>
--

5.2 教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。

5.2①研究科（専攻）のカリキュラムにふさわしい教員組織を備えていますか。 **2018年度 5.2①に対応**

はい
<p>※教員像及び教員組織の編制方針、カリキュラムとの整合性、国際性、男女比等の観点から教員組織の概要を記入。</p> <p>キャリアデザイン学研究科は2つのプログラムより構成されている。ベースには基礎科目、共通科目を配置している。これらを担当する教員は高い専門性を有した教育学、経営学、隣接学問分野（心理学・社会学）等の教員であり、当研究科のカリキュラムにふさわしい教員組織を備えている。</p>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

2021 年度末に定年退職した教員の補充として、2022 年度より、教育経営論（キャリア教育・発達プログラム科目）担当の専任教員が採用された。教員補充を適切に行うことを通して、キャリアデザイン学研究科のカリキュラムに適合的な教員組織を編制している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・キャリアデザイン学研究科 要項、履修手引き、カリキュラムと担当教員一覧
- ・下記、2022 年度教員数一覧（専任）を参照

2022 年度教員数一覧

(2022 年 5 月 1 日現在)

研究科・専攻 ・課程	研究指導 教員数	うち教授数	設置基準上必要教員数	
			研究指導 教員数	うち教授数
修士	18	17	5	4

研究指導教員 1 人あたりの学生数：2.11 人（院生 38 人在籍、2022 年 5 月）

5.2③特定の範囲の年齢に著しく偏らないように配慮していますか。2018 年度 5.2②に対応

はい

【特記事項】※ない場合は「特になし」と記入。

教員採用に関しては、学部の教員採用とも密に関係づけながら、若手研究者を積極的に採用しており、年齢的なバランスに問題はない。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし、下記年齢構成一覧参照

年齢構成一覧

(2022 年 5 月 1 日現在)

年度\年齢	26～30 歳	31～40 歳	41～50 歳	51～60 歳	61～70 歳
2022	0 人 0.0%	1 人 6.6%	7 人 38.9%	7 人 38.9%	3 人 16.7%

5.3 教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。

5.3①大学院担当教員に関する各種規程は整備されていますか。2018 年度 5.3①に対応

はい

【根拠資料】※大学院担当教員に関する規程・内規等の名称を箇条書きで記入。

- ・当研究科では 2011 年に大学院担当教員の基準を明確化し規定を整備している。規定に基づき適切に教員募集・任免・昇格は行われている。

5.3②規程の運用は適切に行われていますか。2018 年度 5.3②に対応

はい

【教員の募集・任免・昇格に関する学部教授会との連携体制】※教員の募集・任免・昇格に関し、学部教授会とどのような連携が行われているか概要を箇条書きで記入。

- ・学部の専任教員採用の際には、大学院教育担当も兼ね大学院教育可能な研究者であることを前提とした採用を行っている。募集に際し、専門領域と大学院カリキュラムとの整合性を同時に勘案しつつ規定を参照しながら、大学院教授会において意見交換し、結果を学部の教員採用人事に反映している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・教員の募集・任免・昇格に関するキャリアデザイン学内規

5.4 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

5.4①研究科（専攻）独自の F D 活動は適切に行なわれていますか。2021 年度 2.1①に対応

A：従来通り効果的に取り組むことができた

【F D 活動を行うための体制】※箇条書きで記入。

- ・法政大学キャリアデザイン学会を独自に開催しており、広く学外にも公開しキャリア関連の研究者、実務家など先端

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。



的な研究業績を有する研究者等を講演者に招聘し、学会活動を積極的に推進している。教員、院生、修了生、学内外の人々などと相互の自己研鑽を積極的に促進している。
【2021年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】※箇条書きで記入。
・法政大学キャリアデザイン学会の活動実績資料を参照
【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
特になし
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
法政大学キャリアデザイン学会活動実績資料

5.4②研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策を講じていますか。2021年度2.1②に対応

A：従来通り効果的に取り組むことができた
※取り組みの概要を記入。
・法政大学キャリアデザイン学会の開催、大学院シンポジウムの開催、全教員・全院生参加による修士論文構想発表会・中間発表会の開催等により、積極的に研究活動を活性化するための方策を講じている。 ・修士課程修了後、院生が提出した修士論文をもとに指導教員との共著の形式で一般書籍化している。実務的なテーマが多いがゆえの本研究科の社会貢献と位置づけられる。
【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
特になし
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
・法政大学キャリアデザイン学会活動実績資料、大学院シンポジウム資料 ・書籍 「プロティアン教育 三田国際学園のキャリアエスノグラフィー」田中研之輔、内田雅和（キャリア・ナレッジ） 「女性自衛官 キャリア、自分らしさと任務遂行」上野友子 武石恵美子（光文社新書）

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
・高度な専門性、豊富な研究業績を持つ研究者がバランスのとれた年齢構成のもと、カリキュラムに適合的な教員組織を編成している。FD活動、研究活動においては、特に法政大学キャリアデザイン学会の取り組みが大きな意義を有している。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に行っている場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
・特になし

【教員・教員組織の評価】

<p>キャリアデザイン学研究科では、教員の採用や昇格の基準は、明確に定められており、組織的な教育を実施するための役割分担や責任の所在も明確にされている。</p> <p>同研究科では、教員の補充が適切に行われ、カリキュラムに適合的な教員組織が編成されている。</p> <p>同研究科は若手研究者を積極的に採用しており、年齢的なバランスに問題はない。</p> <p>大学院担当教員に関する規程は整備されており、専任教員採用時には学部と連携し、規程が参照されるなど、その運用は適切に行われている。</p> <p>同研究科では、法政大学キャリアデザイン学会を開催し、学内外から多彩な講演者を招聘し、教員の研究活動の活性化や資質の向上を図っているほか、教員、院生、修了生、学内外の人々などと相互の自己研鑽を積極的に促進しており、FD活動は概ね適切に行われている。また、同研究科では、院生が提出した修士論文をもとに指導教員との共著の形</p>
---

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

式で一般書籍化しており、社会人院生による実務的な研究テーマが多い同研究科の特色を生かした社会貢献として評価される。

## 6 学生支援

### (1) 点検・評価項目における現状

6.1 学生支援に関する大学としての方針に基づき、学生支援の体制は整備されているか。また、学生支援は適切に行われているか。

6.1①研究科（専攻）として外国人留学生への修学支援について適切に対応していますか。【2018年度 6.1①に対応】

A： 従来通り効果的に取り組むことができた

※外国人留学生への修学支援に関する取り組みの概要を記入。

キャリアデザイン学研究科の応募者には留学生も存在するが、実際には入学には至っていない。このため、修学支援は行っていないが、今後、留学生の入学者がいる場合には、修学支援を丁寧に行う予定である。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

6.1②研究科（専攻）として学生の生活相談に組織的に対応していますか。【2018年度 6.1②に対応】

A： 従来通り効果的に取り組むことができた

※学生の生活相談に関する取り組みの概要を記入。

キャリアデザイン学研究科は社会人を対象として社会的ニーズに応える高度専門人材養成を行う研究科であり、ストレートマスターを想定した狭い意味での「生活相談」とはやや異なるが、社会人が実務と研究のバランスをとっていく上でのアドバイスや、修士レベルの論文を書くのが初めての院生に対する、修論執筆プロセスにおける学術的調査研究の取り組み方・心構えの指導など、院生からの相談に向けて全教員がきめ細やかな対応を行っている。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

6.1③博士後期課程において、将来大学教員になった際に必要なスキルを得られる機会を設定していますか。また当該機会に関する情報を適切に提供していますか。【新規】

【はい・いいえ】どちらかを選択してください

※取り組みの概要を記入。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

### (2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

・社会人院生の多様化・高度化するニーズに対して、社会人院生への指導経験豊富な教授陣がきめ細やかな対応を行っている。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

**(3) 課題・問題点**

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既の実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
・特になし

**【学生支援の評価】**

キャリアデザイン学研究科の応募者には留学生も存在するが入学には至っていない。  
同研究科は、社会人を対象として社会的ニーズに応える高度専門人材養成を行う研究科であり、社会人が実務と研究のバランスをとっていく上でのアドバイスや修士論文の指導など、社会人院生からの相談に適切な対応がなされているのは評価される。

**7 教育研究等環境**

(1) 点検・評価項目における現状

7.1 教育研究を支援する環境や条件を適切に整備し、教育研究活動の促進を図っているか。

7.1①ティーチング・アシスタント (TA)、リサーチ・アシスタント (RA)、技術スタッフ、授業支援アシスタント、ラーニングサポーターなどを配置することによる、教員の教育研究活動を支援する体制は整備されていますか。2018年度

7.1①に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた
※教育研究支援体制の概要を記入。
現状ではキャリアデザイン学研究科に TA や RA、技術スタッフなどは配置されていないが、院生に対しては、そうしたスタッフによらずとも、個々の教員が、講義、演習、修論構想発表会・修論中間発表会などの種々の機会を通じて研究を丁寧に指導している。また、教員相互においても、FD 活動、研究活動などにおけるピアサポートの取り組みが熱心に行われており、教育研究支援体制として不足ないものとなっている。
【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
特になし
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
・特になし

7.1②研究科（専攻）として、学生の学習環境や教員の教育研究環境の整備に関して、COVID-19 への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。新規

※取り組みの概要を記入。
教授会にて、オンラインでの授業実施等に関する情報交換を行っている。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
・特になし

**(2) 長所・特色**

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
・特になし

**(3) 課題・問題点**

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既の実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。  
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ  
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

内容
・特になし

**【教育研究等環境の評価】**

キャリアデザイン学研究科は、社会人を対象として社会的ニーズに応える高度専門人材養成を行う研究科であり、教員の教育や研究に対する支援はピアサポートが主となっている。TA や RA や技術スタッフなどは配置されていないが、ピアサポート中心の教育研究支援体制で特に不足はないものと判断される。COVID-19 への対応・対策については、教授会でオンラインでの授業実施等に関する情報交換が行われている。

**8 社会貢献・社会連携**

(1) 点検・評価項目における現状

8.1 社会連携・社会貢献に関する方針に基づき、社会連携・社会貢献に関する取り組みを実施しているか。また教育研究成果等を適切に社会に還元しているか。

8.1①学外組織との連携協力による教育研究の推進に関する取り組み及び社会貢献活動を行っていますか。2018 年度 8.1①に

対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた
※取り組み概要を記入。
キャリアデザイン学研究科の教員は、経営学、教育学、心理学、社会学などといった分野の各種学会での活動をはじめ、理論的にも実践的にも、学外の社会組織との協働に力点を置いた取り組みを行っており、社会貢献や教育研究成果の社会還元に積極的である。キャリアデザイン学は理論に裏付けられた実学であり、高度な専門職を目指す院生の学習ニーズに応えるのと同時に、社会の人材ニーズにも対応している。
【2021 年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。
特になし
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
・特になし

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
・研究科としては、年に 1 度キャリアに関する議論をけん引するシンポジウムを開催している。また個々の教員も、企業、厚生労働省、財務省、経済産業省、東京都、一般・公益社団法人等からの依頼を受け、その専門性を生かした審議会委員や専門委員、団体等の役員、研修講師などを務めている。日本キャリアデザイン学会等においては、本研究科の教員が複数、役員を務めている。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既の実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
・特になし

**【社会貢献・社会連携の評価】**

キャリアデザイン学研究科は、年に 1 度キャリアに関する議論をけん引するシンポジウムを開催している。また個々の教員は学会活動のみならず、その専門性を活かして審議会委員や専門委員、研修講師を務めるなど、社会貢献や教育研究成果の社会還元に積極的である。

**9 大学運営・財務**

(1) 点検・評価項目における現状

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。  
 ※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ  
 ※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

9.1 方針に基づき、学長をはじめとする所要の職を置き、教授会等の組織を設け、これらの権限等を明示しているか。また、それに基づいた適切な大学運営を行っているか。

9.1①教授会等の権限や責任を明確にした規程を整備し、規程に則った運営が行われていますか。2018年度9.1①に対応

はい
※概要を記入。
執行部は研究科長（兼 専攻主任）、専攻副主任の2名から構成され、大学院教授会は月1回開催されている。その他の教員についても、質保証委員、進学相談委員、入試作問委員、シンポジウム委員、修士論文研究成果集作成委員などをそれぞれ担当する。各教員の担当する役割とその内容を明確化し責任体制をとり適切な運営を行っている。
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。
・キャリアデザイン学研究科 2022 年度役割分担一覧表

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
・特になし

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既の実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
・特になし

【大学運営・財務の評価】

キャリアデザイン学研究科では、研究科長（兼専攻主任）と専攻副主任の2名により執行部が構成され、教授会が月1回開催されている。各教員により種々の委員会が構成され、各教員の担当する役割や責任は明確化されている。権限や責任を明確にして適切な運営を行っていることは評価されるが、教授会等の権限や責任を定める規程の整備状況についても具体的な検証を行いその結果を示すことが望まれる。
---

III 2021 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
1	中期目標	プログラム制による体系的なカリキュラムを通じた専門性深化の継続と浸透。	
	年度目標	オンライン授業では対面と変わらぬ授業の質と教育効果の確保を目指す。カリキュラム全体（基礎・共通科目、プログラム科目、演習）の運用状況の把握、問題の発見と解決に加え、eLCoreを活用した研究倫理教育を徹底する。	
	達成指標	今年度も引き続き、アンケート等によりカリキュラムの運用状況の把握、問題の発見を行う。オンライン授業に関しては適宜、院生と情報交換・状況把握を行う。研究倫理教育に関しては、次年度に演習を履修する修士1年生 eLCore 修了率 100%を目標とする。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	授業アンケートや院生とのやりとりにおいて、授業に関して目立った不満や苦情はなく、現行カリキュラムは順調に運用されている。昨年度は新型コロナ対応のため入学試験を面接のみで行ったが、各教員への聞き取りの結果、入学者の質の低下は見られなかった。研究倫理教育に関しては、対象者の eLCore 修了率 100%を達成した。
改善策		現行カリキュラムや授業に対する満足度は高いが、学部とのバランスにおいて大学院への人的資源の投入が過大になっていることへの対策、および教育の質的向上のため、授業運営の効率性と教育効果の観点からカリキュラムの見直しが必要である。この課題を受け、年度目標としては設定していないが年度途中からカリキュラム改革の検討を開始した。	
質保証委員会による点検・評価			
所見	研究倫理教育の eLCore 修了率 100%を達成したことは評価できる。		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

			オンライン授業についても、「年度目標」欄に掲げられているように、授業と教育の質を維持するよう努めたと思われるが、評価については教員に対する聞き取り調査だけでなく、たとえば「学生による授業改善アンケート」の結果を精査する以外にも、院生側の意見も集約し、オンライン形式による授業の質と教育効果を見極める必要があるのではないかな。	
		改善のための提言	修了所要単位のうち多くの単位を取得する修士1年生の段階における学習成果、教育効果の把握・検証は、カリキュラム改革の中でも引き続き行っていくべきであろう。また、修士2年生については、シラバスの第三者確認を経て、演習科目の評価基準(配点)について方針を定めたところである。これを機に「キャリアデザイン学演習Ⅰ・Ⅱ」の科目としてのあり方を現状より明確化することを進めてはどうだろうか。	
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】		
2	中期目標	研究科開設から5年という節目において、より一層の教育研究指導方法の向上を図る。		
	年度目標	前年度に引き続き、シラバス通りの授業実施の徹底と、マンツーマンでの修士論文指導体制を原則として進める。および年3回の修論発表会を実施し、対処すべき課題が生じた際には迅速かつ適切に対応する。		
	達成指標	大学院生の研究計画に基づいて修士論文指導教員を適切に配置し、ミスマッチのない指導体制を確立する。授業上で対処すべき課題は授業アンケート等で把握し、適宜、研究科内での情報共有と対応を行う。発表会の対面形式での開催が困難な場合はオンラインでの発表とフィードバックを行う		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	長期履修者や留年者がいたことにより演習の履修者が教員数を上回ったため修士論文指導は完全なマンツーマン体制とはならなかったが、教員配置のミスマッチや不十分な指導などの問題は発生していない。発表会は4月はハイブリッドで行ったが9月と11月はオンラインで実施した。	
		改善策	マンツーマン指導に対する院生の満足度は高いが、履修者1名のみでの授業コマとなるため大学院への人員配置が過大となっている。また、長期履修や留年により演習の履修者数が年ごとに変動するため、マンツーマン体制を原則とすると年により各教員の授業担当コマ数に過不足が発生しうる。これらの問題への対応策を検討中である。	
質保証委員会による点検・評価				
所見	マンツーマンに準ずるかたちで教育の質を担保することができたこと、およびマンツーマン体制について、大学院への人員配置が過大となっている点に着目し、対応策について検討を始めたことは評価できる。			
改善のための提言	大学院への人員配置の過大分を学部に移行するのに伴い、仮に、1人の教員が2名の院生を受け持つことが常態化するようになることを見込むと、過度な負担がなく指導が可能になる全体の体制が構築されているのかについても確認が必要となってくる。例えば、修了要件の見直し等も含めるなど、人員配置の適正化とワークロードの抑制を同時に成り立たせるための抜本的な検討も必要になってくるのではないかな。			
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】		
3	中期目標	修了生の学会発表、学会誌への投稿等の継続的促進を図る。研究科修了生のレベルの維持・向上を図り、高度職業人養成機関としての本研究科の社会的地位の継続的な向上を図る。		
	年度目標	大学院生の学習状況を把握し、十分な学習成果を出せるよう支援する。また、修了生のうち優れた研究を行った者については学会での研究発表、学会誌への論文投稿等の促進を継続するとともに、修了生の研究成果の実務界への還元も推奨、促進する。		
	達成指標	年3回の修士論文検討会等において、研究の進捗状況の把握と助言を行い、研究水準を理由とする修了試験不合格者の発生を防ぐ。また、学会発表、論文発表その他研究成果の社会還元の実績に関する情報を研究科内で共有し、Webサイト、シンポジウム等で広く公表する。		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
理由		年3回の修士論文検討会は初回はハイブリッド、第2回と第3回はオンラインで実施した。インターネット接続が不安定になる参加者は数名いたが発表や質疑に支障をきたすほどではなく、発表・質疑とも十分に行えた。オンラインでのファイル共有・コメント共有により発表・質疑の記録を電子化することができた。今年度は修士論文提出予定者のうち3名が提出見送りとなったが、理由は新型コロナの影響による調査研究の遅延によるものである。		
改善策	修士論文検討会やシンポジウムをオンラインで実施したことにより、会場の制約がなく、開催時間や参加者数を柔軟に設定することができた。オンラインでの実施は今後も有効活			

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善することができた、A:従来通り効果的に取り組むことができた。B:改善することができなかった。」を意味する。

		用できる可能性があるが、対面実施の場合との質疑や助言、情報提供の質の比較は今後のモニタリング・検討が必要である。 修士生の研究成果は研究科 Web サイトに掲載しシンポジウムに併せて実施している進学相談会で広報している。今年度の実績に関する情報を集約し、掲載内容を更新する。	
		質保証委員会による点検・評価	
	所見	修士論文検討会について、ハイブリッド、オンラインという、対面とは異なる形式であっても、発表・質疑に支障をきたすほどのトラブルもなく実施できたことは評価できる。ただし、修士論文の提出見送りが3件に及んだことについては、新型コロナの影響によるものということではあるが、提出される論文の質が全体としてどうであったかも含めて、今後改めて確認していく必要があるのではないか。また、修士1年の時に構想発表をし、修士2年の時に3年計画から2年に短縮するつもりだった者で、やはり短縮しないと決断した者も含めれば、実質的な提出見送りは3件よりも多い可能性がある。いずれにせよ、次年度以降においても、修士論文提出見送りの要因を確認していくことは、院生の研究に対する研究科としての支援のあり方を振り返る契機になることと思われる。	
	改善のための提言	「修士生のうち優れた研究を行った者については学会での研究発表、学会誌への論文投稿等の促進を継続する」と「年度目標」欄にあるが、となると研究生の成果報告だけでなく、研究生を受け入れた後で教員がどのような指導をしているのかについても、教員間で情報共有し、研究生指導のいっそうの充実を図る取り組みがあると良いのではないかと。	
No	評価基準	学生の受け入れ	
4	中期目標	学生募集はホームページ、パンフレット、入学相談会、大学院シンポジウム、研究計画書説明会など、あらゆる機会を通して入学志願者に詳しい入試情報を提供してきており、このような取り組みをいっそう充実させる。	
	年度目標	昨年度は筆記試験を行わなかったため例年よりも保守的な選抜を行ったことが影響し、定員充足率は80%にとどまった。数値上は100%を目標とするが、従来より、合格基準点を下げることなく質を厳しく担保しつつも定員充足率を適正に管理してきており、こうした充足率管理を継続していく。	
	達成指標	今年度は筆記試験を従来通りに実施し、過度に保守的にならずに選抜を行い100%の定員充足率を目標とする。ただし、合格基準点を安易に下げることなく、書類選考、筆記試験、口述試験による研究遂行能力の評価に基づいて厳格に入学者を選抜し、質の高い教育の確保・徹底に努める。 新型コロナ感染状況の悪化により筆記試験が行えなくなった場合は、筆記試験なしで入学した今年度の新入生の学力、学習態度の状況を勘案して代替的な選抜方法を検討する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	今年度は秋入試・春入試ともに例年通りに書類選考、筆記試験、面接試験にて入学試験を実施した。可否の判定は合格基準および合格基準点に従って厳格に行った。結果、秋入試では9名、春入試では9名を合格とし、定員充足率90%に相当する18名の合格者となった。入試倍率は2倍以上を確保できており、募集に関しては修士生や学会での口コミやシンポジウムの広報が成果につながったと考えられる。
		改善策	今年度の新入生の学力に関して授業担当教員に対して聞き取りを行った結果、昨年度の書類選考と面接試験のみ（筆記試験なし）の入試により入学者の質が著しく低下したという傾向は見られなかった。ただし、今後の修士論文執筆の状況を見て筆記試験なし入試の影響を引き続きモニタリングしていく。入学試験の実施形式に関しては、今年度と同様、次年度以降も可能な限り筆記試験の実施を前提に入学試験を企画していく。
質保証委員会による点検・評価			
所見	筆記試験も含め例年通りの入学試験を実施し、その結果として、定員充足率90%で、入試倍率は2倍以上を確保できるだけの受験者数を維持していることは、質を担保した上での定員充足率適正管理として評価できる。		
改善のための提言	執行部が「改善策」欄ですでに述べているように、筆記試験なし入試の影響については、今後の修士論文執筆の状況を引き続きモニタリングしていく必要がある。		
No	評価基準	教員・教員組織	
5	中期目標	当研究科では2011年に大学院担当教員の基準を明確化し規定を整備している。規定に基づき適切に教員募集・任免・昇格を行うことを継続していく。	
	年度目標	今年度は1名の定年退職者補充を予定している。今年度は、新たに着任した新任教員の授業その他の業務のサポートを必要に応じて的確に行う。併せて、教員組織の質的向上を目標とし、各教員の、法政大学キャリアデザイン学会等における相互研鑽と、各種学会への参加、論文発表を通じた自己研鑽と成果発現に努める。	
	達成指標	年度内に新任教員1名を採用する。また、教員配置に関する課題を継続的にモニタリングし、必要に応じて対処を行う。教員の研究成果に関しては、質の確保という点から単純な数値目標を追求することは適切でないが、本研究科のカリキュラムに関連する幅広い観点	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

		からの研究を奨励し、状況のモニタリングとして、各教員の研究実績に関する情報を共有する。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	新任教員1名の採用は予定通りに完了したが、院生数名が長期履修を選択したため来年度は演習（修士論文指導）の履修者が少なく、一部の教員の演習科目が来年度は不開講となり、担当コマ数維持のため来年度限定で担当科目の調整が必要となった。研究実績に関しては大学の学術研究データベースの共有することにし、院生や志願者にも学術研究データベースの閲覧を推奨している。
	改善策	年度ごとの入学者と演習履修者の変動により、現状の演習（修士論文指導）マンツーマン指導体制の下では演習科目の担当教員数が毎年変動しうるので教員配置が不安定化する。この問題への対応策を含めてカリキュラムの再検討を進めている。教員の学術活動を促進するため、業務の効率化に引き続き取り組んでいく。行事の実施体制の見直しにより過去3年間で教員1人当たり週末出勤は1日は削減されている
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	定年退職者補充として新任教員1名を採用できたことは評価できる。また、教員の学術活動を促進するため、過去3年間で教員1人当たり週末出勤を1日削減を実現したことも高く評価できる。
	改善のための提言	演習履修者数の変動に起因する教員配置の不安定化に関しては、カリキュラム改革の中でも検討課題の一つとして議論していくことが求められる。各教員の研究実績に関する情報は、学術研究データベースへの登録を各自行っている。各自でアクセス可能であるが、「理由」欄で述べられているように「共有している」とするためにはもう一歩踏み込んだ手続きが必要なのではないか。院生の指導教員選びや大学院受験者向けなどそれぞれの対象者や文脈に応じた研究業績の示し方があってもよいのではないかと。
No	評価基準	学生支援
6	中期目標	社会人院生が実務と研究のバランスをとっていく上でのアドバイスや、修士レベルの論文を書くのが初めての院生に対する、学術的調査研究の取り組み方・心構えの指導など、全教員がいっそうきめ細やかな対応を行っていく。
	年度目標	新型コロナ対応に伴う学事日程・行事運営方法の変更等に関しては可及的速やかに院生に情報提供を行う。従来は院生から代表者を選出し日常的な連絡事項の窓口としてきたが、対面の交流機会が少ないゆえに連絡に支障が出るケースが昨年度見られたため、今年度は執行部から院生全員に直接連絡する方法を主体とする。
	達成指標	対面でのコミュニケーションが取れないがゆえに生じうる連絡の不備や学習上の不便による問題を未然に防ぎ、やむを得ず問題が生じた場合は迅速に解決に努める。例年通りの院生支援を提供できることを目指し、非対面であるがゆえに生じた問題に起因するトラブル・退学の発生を防ぐ。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	学事日程・行事運営に関して、院生代表者への連絡に加え、連絡事項の内容に応じて院生全員に対して直接メールで連絡をするようにした。修士1年生に対しては諸連絡はメールで行う旨を入学時のガイダンスで伝えてあったため、非アクティブなアドレスへの連絡や見落としによって連絡に支障が出たケースはなかった。
	改善策	研究科執行部からの連絡は円滑に行えたが、行事当日の準備などの詳細や院生研究室の管理に関して、修士2年生と修士1年生との間の引継ぎは不十分だったようである。この原因は今年度の入学式の分散開催によって院生同士の引継ぎを対面で行う時間がとれず文書とメールで済ませたことが一因と考えられる。そのため、次年度は入学式の日に院生同士の対面での引継ぎの時間を確保している。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	執行部からの連絡については円滑に行われ、非アクティブなアドレスへの連絡や見落としによって連絡に支障が出たケースがないことまで確認ができていることは評価できる。しかし、すでに用意をしてあるプラットフォーム上での交流が活発にならなかったことは、対面による引継ぎ以外の要素もありうる。同学年同士の交流、および学年間の交流をさらに促進するための創意工夫が必要なのではないかと。
改善のための提言	1年生が多く履修している授業、1年だけでなく2年もある程度多く履修している授業、院生代表者が履修している授業などの情報を教員間でも共有すれば、院生代表者だけに頼らず、情報の伝え方の複線化が実現できる可能性もある（院生代表者が責任を持って伝える形式を維持することは大事であるが）。たとえば、基礎科目（調査系3科目）の授業は、1年生の大半が履修しており、教育・発達／ビジネスのプログラムごとに分かれがち	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。  
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ  
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。



		な1年生が、プログラムを超えて情報共有や交流を行う機会となっており、教員側からの情報伝達も比較的行いやすい状況である。 また、コロナ禍に伴い、院生研究室の利用者数や利用頻度などの状況については確認が必要なのではないか。	
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
7	中期目標	キャリアデザイン学は理論に裏付けられた実学であり、高度な専門職を目指す院生の学習ニーズに応えるのと同時に、社会の人材ニーズにも対応していくことに力点を置く。	
	年度目標	大学院修了者および教員の研究成果を学会、学術雑誌にて発信し、キャリアデザイン学の知見を広く社会に提供する。また、大学院修了者による、研究成果の実践への還元も推奨していく。	
	達成指標	大学院修了者および教員により、研究成果を学会や学術雑誌で発表するのみならず、研究実績および実践への応用実績をウェブサイトやシンポジウム等で広報し、研究成果の社会還元・普及を促進する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	今年度は日本キャリアデザイン学会での自由論題 7 本の報告、査読論文 1 本の発表を始め、研究生・修了生による学会活動は引き続き活発に行われた。また、修了生と教員との共著書が計 2 冊今年度出版され、実務家・一般向けの研究成果の発信も行われている。教員の研究実績は大学の学術研究データベースに掲載しており、各自毎年更新をしている。
		改善策	今年度は研究生・修了生により日本キャリアデザイン学会での計 3 本の実践報告がなされ、研究成果の実践での応用実績を出すことができた。今後も研究発表のみならず実践での応用による研究成果の還元を促進し、シンポジウムでの発信等を通じて社会人大学院としての社会貢献をしていく。
質保証委員会による点検・評価			
所見	修了生の研究成果は研究科 Web サイトに掲載している。論文、著書、学会報告など幅広い形態で研究成果の社会還元していることは評価できる。		
改善のための提言	本研究科の社会人院生が中心であることもあり、修了生が活躍するフィールドは幅広い。ただ、「高度な専門職を目指す院生の学習ニーズ」および「社会の人材ニーズ」の両方に合致する例として、大学院修了後に大学のキャリア教育科目を担当するようになった修了生の活躍が複数あるのではないかと（専任、兼任含め）。これは、「改善策」欄で言われている「社会人大学院としての社会貢献」に該当する例と思われるため、研究科として情報を集約する仕組みの構築を検討してもよいのではないかと。		
<p><b>【重点目標】</b> 今年度も5月の段階で対面式授業が行えず収束の見通しが不透明である中で、オンライン授業のツールを駆使し、例年の対面授業と遜色のない質での授業の実施と教育効果の実現を目標とする。目標達成の基準として、授業のオンライン化など新型コロナ対応に起因する院生の学習環境の悪化や学習意欲の低下を防止して予定通りの修了につながることに、同対応に伴う退学者の発生を防止する。</p> <p><b>【目標を達成するための施策等】</b> 授業に関しては、研究科として一律の実施方法を定めず、科目の性質や履修者の受講環境（勤務の状況、インターネット接続環境等）に配慮し、授業ごとに最適な方法で実施する。実施方法とそれに伴う課題や参考になる点などは教授会等の場において情報を共有して授業の品質の維持・向上に活用する。また、登校機会が少ないがゆえに院生研究室の管理と備品の管理が不十分になり研究環境が悪化する恐れがあるため、OA 機器・消耗品等の備品の在庫や設備のメンテナンスの状況を把握し、必要な備品の補充・設備の保全・更新を行う。</p> <p><b>【年度目標達成状況総括】</b> 授業に関しては、「最低限、コロナ前の教育の質を維持する」という方針の下、大学の警戒レベルと院生の学習ニーズに合わせて授業ごとにオンライン、ハイブリッドを組み合わせて対応した。その結果、授業形態を理由とする学習効果の低下は見られず、院生からも特段の強い改善要望は出されなかったため、十分な対応ができたと考えている。大学院生の研究環境に関しては、院生に設備の状況をヒアリングし、特色ある研究プログラム助成金の一部を用いて、高度なデータ分析を行うためのツールを備えたコンピューターの導入などの改善を行った。今年度の重点目標に加えて、学部を含めた組織全体としてのパフォーマンス向上のため、会議運営の改善や業務あたり担当者数の削減などの業務の効率化や、シンポジウムなどの行事を大学院教員の活躍の場にする試みを進めてきた。前者に関しては会議時間や担当者数の半減を実現したが、後者に関しては施策としては実行はしたものの目的の達成は今後の課題として残された。</p>			

**【2021 年度目標の達成状況に関する大学評価】**

<p>キャリアデザイン学研究科の 2021 年度目標に対する達成状況は、概ね適切である。</p> <p>修士論文のマンツーマン指導体制が、きめ細かい個別指導により教育の質を高めた院生の満足度を高めていることは、高く評価できる。一方、その体制に割かれる授業担当コマの配分が著しく多くなり、学部教育の質や教員の負担等にそのしわ寄せが生じるおそれがあることから、大学院と学部の高い教育の質を両立していくために、大学院と学部の人員</p>
---

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。  
 ※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ  
 ※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

配置の全体的な最適化を含めた総合的な教育指導体制の再構築が課題になる可能性があると思われる。この課題に対応するための今後の取り組みの進展を期待したい。

IV 2022 年度中期目標・年度目標

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
1	中期目標	プログラム制による体系的なカリキュラムを通じた専門性深化の継続と浸透。
	年度目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現行カリキュラムや授業への満足度は高いが、学部との人員、負荷のバランスを考慮しつつ、カリキュラム全体（基礎・共通科目、プログラム科目、演習）、授業、指導方法等についての昨年度後半からの見直しを具体的に行い一定の方向性を決める。</li> <li>・eLCore を活用した研究倫理教育を徹底する。</li> <li>・「学生による授業改善アンケート」などを精査して、オンライン形式の授業の質と教育効果を検証する。</li> </ul>
	達成指標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・見直しを行い、修論指導体制、修了要件等について一定の方向性を決める。</li> <li>・今年度も引き続き、アンケート等によりカリキュラムの運用状況の把握、問題の発見を行う。</li> <li>・オンライン授業に関しては適宜、院生と情報交換・状況把握を行いながら教育効果の検証を図る。</li> <li>・研究倫理教育に関しては、次年度に演習を履修する修士1年生 eLCore 修了率 100%を目標とする。</li> </ul>
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
2	中期目標	より一層の教育研究指導方法の向上を図る。
	年度目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前年度に引き続き、シラバス通りの授業実施の徹底と、マンツーマンでの修士論文指導体制を原則として進める。</li> <li>・昨年度から引き続き、学部/大学院の人員・負荷バランスも考慮しつつ、修論指導の体制、修了要件等を見直し一定の方向性を決める。</li> <li>・また年3回の修論発表会を実施し、対処すべき課題が生じた際には迅速かつ適切に対応する。</li> </ul>
	達成指標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学院生の研究計画に基づいて修士論文指導教員を適切に配置し、ミスマッチがないように指導体制を確立する。</li> <li>・授業上で対処すべき課題は授業アンケート等で把握し、適宜、研究科内での情報共有と対応を行う。</li> <li>・修士論文の発表会の形式（オンラインか対面か、併用か）の判断はコロナの状況も考慮しつつ、判断しつつ実施する。</li> </ul>
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
3	中期目標	修了生の学会発表、学会誌への投稿等の継続的促進を図る。 研究科修了生のレベルの維持・向上を図り、高度職業人養成機関としての本研究科の社会的地位の継続的な向上を図る。
	年度目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学院生の学習状況を把握し、十分な学習成果を出せるよう支援する。</li> <li>・また、修了生のうち優れた研究を行った者については学会での研究発表、学会誌への論文投稿等の促進を継続するとともに、修了生の研究成果の実務界への還元も推奨、促進する。</li> <li>・研究生への指導内容等についても教員間で情報共有し指導のさらなる充実を図る。</li> </ul>
	達成指標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年3回の修士論文検討会等において、研究の進捗状況の把握と助言を行い、研究水準を理由とする修了試験不合格者の発生を防ぐ。</li> <li>・また、学会発表、論文発表その他研究成果の社会還元の実績に関する情報を研究科内で共有し、出版物、Web サイト、シンポジウム、セミナー等で広く公表する。</li> </ul>
No	評価基準	学生の受け入れ
4	中期目標	学生募集はホームページ、募集要項、進学相談会、大学院シンポジウム、研究計画書説明会など、あらゆる機会を通して入学志願者に詳しい入試情報を提供してきており、このような取り組みをいっそう充実させる。
	年度目標	一昨年度（2020 年度）はコロナ禍対応により、筆記試験を実施しなかったが、昨年度（2021 年度）は従来どおりに実施し、口述試験と書類選考に加え、筆記試験を組み込んだ多面的内容とした。今年度もこのような多面的内容で実施する。その上で、定員充足率 100%を目標とする。ただし、合格基準点を下げることなく、質を厳しく担保しつつ、従来通り、定員充足率を適正に管理していく。
	達成指標	定員充足率 100%を目標とする。ただし、合格基準点を安易に下げることにはせず、書類選考・筆記試験・口述試験による研究遂行能力の評価に基づいて厳格に入学者を選抜し、質の高い教育の確保・担保に努める。
No	評価基準	教員・教員組織

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

5	中期目標	当研究科では 2011 年に大学院担当教員の基準を明確化し規定を整備している。規定に基づき適切に教員募集・任免・昇格を行うことを継続していく。
	年度目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今年度新たに着任した教員が 1 名おり、授業その他の業務のサポートを必要に応じて的確に行う。</li> <li>・あわせて、教員組織の質的向上を目標とし、各教員の、法政大学キャリアデザイン学会等における相互研鑽と、各種学会への参加、論文発表を通じた自己研鑽と成果発現に努める。</li> <li>・また、教員各自の修士論文指導等における業務負担に関して効率化を推進する。</li> </ul>
	達成指標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新たな教員へのサポートを、執行部をはじめとして各教員が必要に応じて行う。</li> <li>・あわせて、教員全体の配置に関する課題を継続的にモニタリングし、必要に応じて対処を行う。</li> <li>・教員の研究成果に関しては、単純な数値目標を追及することは質の確保からみて適切ではなく、むしろ本研究科のカリキュラムに関連する幅広い研究を奨励し、モニタリングとして各教員の研究実績に関する情報を共有する。</li> <li>・また、実現可能な業務負担軽減の具体策を検討する。</li> </ul>
No	評価基準	学生支援
6	中期目標	社会人院生が実務と研究のバランスをとっていく上でのアドバイスや、修士レベルの論文を書くのが初めての院生に対する、学術的調査研究の取り組み方・心構えの指導など、全教員がいっそうきめ細やかな対応を行っていく。
	年度目標	執行部が院生全員に直接連絡する機会も設けたが、これに関する適正な運用を継続する。また、電子メールだけでなく、google drive や zoom 等を通じた、オンラインでの院生間および院生教員間のコミュニケーションの可能性を探り、その実施を推進する。
	達成指標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・院生間および院生教員間における連絡の不備や学習上の不便を未然に防ぐ。やむを得ず問題が生じた場合は迅速に解決に努める。</li> <li>・従来通りの院生支援が提供されることを目指し、非対面であるがゆえの問題・トラブル・退学等の発生を防ぐ。</li> </ul>
No	評価基準	社会連携・社会貢献
7	中期目標	キャリアデザイン学は理論に裏付けられた実学であり、高度な専門職を目指す院生の学習ニーズに応えるのと同時に、社会の人材ニーズにも対応していくことに力を置く。
	年度目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学院修了者および教員の研究成果を学会、学術雑誌にて発信し、キャリアデザイン学の知見を広く社会に提供する。</li> <li>・また、大学院修了者による研究成果の実践への還元も推奨していく。</li> </ul>
	達成指標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学院修了者および教員により、研究成果を学会や学術雑誌で発表するのみならず、研究実績および実践への応用実績をウェブサイトやシンポジウム等で広報し、研究成果の社会還元・普及を促進する。</li> <li>・また、日本キャリアデザイン学会等関連学会において各自が貢献する。</li> </ul>
<p><b>【重点目標】</b>          学部と大学院の人員、負荷のバランスを考慮しつつ、カリキュラム全体（基礎・共通科目、プログラム科目、演習）、授業、指導方法等についての昨年度後半からの見直しを具体的にを行い一定の方向性を決める。</p> <p><b>【目標を達成するための施策等】</b>          講義科目の単位や、修士論文の指導方法・分担、実践的応用性を考慮した修士論文の要件についての見直し等を具体的に進め、実施についての判断を行う。</p>		

**【2022 年度中期目標・年度目標に関する大学評価】**

キャリアデザイン学研究科の中期目標と年度目標は、ともに現状分析を踏まえており、概ね妥当である。

重点目標となっている、学部と大学院の人員、負荷のバランスを考慮したカリキュラムの見直しについては、目標を達成するための施策としては、修士論文の要件の見直し等が挙げられているのは大学院側の対応の一つとしては妥当であるとはいえ、最終的に重点目標を達成するためには、学部と大学院の人員や負荷を横断的に比較する視点からの現状の把握と検証などを実施し、学部と連携して相互の情報を共有した上で課題を洗い出して教育課程等の見直しの方向性を議論していくといった、学部と大学院の教育課程全体を俯瞰する施策が必要になると思われる。難しい課題ではあるが、バランスの取れた取り組みの進展を期待したい。

**【大学評価総評】**

キャリアデザイン学研究科では、入学直後のオリエンテーションでの研究科長による履修指導や、マンツーマンでのきめ細かな修士論文指導体制、年 3 回の修士論文検討会を通じた研究水準の維持向上など、充実した教育指導体制が整えられていることは高く評価できる。さらに、修了生による学会発表や学会誌への投稿等の研究成果の社会還元を促進する体制は、社会人大学院である同研究科の特徴を活かした社会貢献として高く評価できる。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

一方、重点目標となっている、学部と大学院の人員、負荷のバランスを考慮したカリキュラムの見直しについては、最終的に目標を達成するためには、学部と大学院の教育課程全体を俯瞰して検証した上で問題を見つけて取り組むことが必要になると思われる。難しい課題ではあるが、研究科の将来の発展に資するバランスの取れた取り組みの進展を期待したい。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。